

する。これらは、集落構造に一定の規範が存在していたことを示していると考えられる。カマド位置や住居規模には差異が認められこうした住居構造の違いと住居跡方向では異なった規範が存在していたのであろう。

住居跡方向は集落領域の区画に起因すると考えられ、第Ⅰ、Ⅱ段階は前段階の継続であるとともに、地形の方向性に規制され区画されていた可能性が推測される。熊野遺跡は中宿遺跡とともに北側に櫛引台地と妻沼低地との境に崖線が存在し、この地形的規制が台地上に展開する律令的集落に規範を設け集落構造を形成させたものと考えられる。しかし、第Ⅲ段階に至っては、これまでの規範とは別の東西南北といった方向性の規範が新たに集落構造に適用され住居跡が構築の際に順次変化したものと考えられる。第Ⅵ段階においてはこの規範に変化がおきたものと考えられる。こうした背

景には、集落領域の規範だけではなく、他の空間領域、また、水田等の条里施行に伴う区割りが、郡内にどのような規範を示していたのかその影響がどの領域までおよんでいたのかが問題となろう。律令時代とは戸籍により個別に人身を把握するとともに、条里により土地の管理を使用としていたのではないだろうか。この様相を熊野遺跡B区では住居跡方向の規範として現象化された結果ではないだろうか。

以上述べてきたように、集落構造の変化が榛沢郡内の傾向としてどこまでとらえることができるのか、また、他群においての傾向を掴むことができるのか、今回検討した新田遺跡、内出遺跡、砂田前遺跡、六反田遺跡では適合した。しかし、白山遺跡では不適合であった。こうしたことが他の集落においてどのような傾向を示すか今後の課題としたい。(赤熊 浩一)

2. 大形甗の問題

熊野遺跡B区からは7点の土師器大形甗が出土し、その中には、内面にミガキ処理を施されていたものもあった。ここでは、熊野遺跡B区を中心とした地域から出土した大形甗について検討し、特に内面ミガキ処理のされている大形甗に注目して考察を加えたい。

a 形態(第193図)

熊野遺跡B区周辺から出土した大形甗を戸森前遺跡(中村1999)・砂田前遺跡(佐藤1998)・熊野遺跡B区(赤熊2000)の編年をもとに分類した。

戸森前Ⅵ期：大形甗・カマドの出現期。胴部の張りが強い。

戸森前Ⅶ期：口縁部の屈曲が弱くなる。

戸森前Ⅷ期：胴部の張りが弱くなる。

砂田前Ⅰ期：長胴化が進む。

砂田前Ⅱ期：大形甗の出土例が増大する。ミガキ処理が施されるものが出現する。

砂田前Ⅲ古期：大形甗の出土例が最も多い。

砂田前Ⅲ新时期：大形甗の出土例が減少しはじめる。

砂田前Ⅳ古期：ミガキ処理された大形甗の出土例なし。

砂田前Ⅳ新时期：胴部が直線的に立ち上がる。
砂田前Ⅴ古期：出土例1例のみ。
砂田前Ⅴ中期：ミガキ処理された大形甗の出土例なし。
砂田前Ⅴ新时期：大形甗の出土例なし。
熊野Ⅰ期：ミガキ処理された大形甗の最終段階。
熊野Ⅱ期：破片のみの出土のため、詳細不明。
熊野Ⅲ期：大形甗の出土例なし。
熊野Ⅳ期：器壁がかなり薄くなる。
熊野Ⅴ期：破片のみの出土のため、詳細不明。
(これ以降大形甗の出土例なし)

大形甗の形態は、同時期の甕の形態の変化と同様に長胴化が進み、口縁部の屈曲も弱くなる。また、器壁の厚さも薄くなる傾向にある。しかし、時期を通して、著しい形態の変化は認められなかった。カマド自体にも大きな変化が起きなかったと推測できる。

第193図 出土遺物対照表	B：砂田前遺跡 (1991)
熊：熊野遺跡B区(2000)	砂：砂田前遺跡 (1998)
六：六反田遺跡 (1981)	岡：岡部条里遺跡(1998)
白：白山遺跡 (1989)	中：中宿遺跡 (1997)

第193図 大形甑の変遷

戸森前Ⅵ期		戸森前Ⅶ期		戸森前Ⅷ期		砂田前Ⅰ期	
砂田前Ⅱ期							
砂田前Ⅲ期(古)							
砂田前Ⅲ期(新)							砂田前Ⅳ期(古)
砂田前Ⅳ期(新)				砂田前Ⅴ期(古)	砂田前Ⅴ期(中)	砂田前Ⅴ期(新)	
熊野Ⅰ期				熊野Ⅱ期	熊野Ⅲ期	熊野Ⅳ期	熊野Ⅴ期

内面ミガキ処理のされた大形甕からもほぼ同じ傾向が見られる。内面ミガキ処理された大形甕は、砂田前Ⅱ期から出現し、熊野Ⅰ期で姿を消すが、同時期にはミガキ処理のされない大形甕も多数出土しており、形態にも大きな差は認められないことから、前時代からの伝統的な土器製作手法と、新しい技術による土器製作が共存していたと考えられる。

b 出土位置（第194図）

大形甕の出土位置について考察する。

大形甕の検出された高さについては確認できないものが数多くあったため、出土位置の平面分布について検討・分類した。そのため、住居跡との同時性は、不正確となる可能性もある。

なお、貯蔵穴は、カマドの右と左から検出されているが、貯蔵穴出土として一括して分類した。

大形甕の出土位置は、カマド周辺からの出土例が最も多く、次は貯蔵穴からである。貯蔵穴周辺に保管されていたものが流入した可能性も考えられる。三番目に多いのが、住居中央部からの出土である。これも、カマド前部より移動した可能性が考えられる。

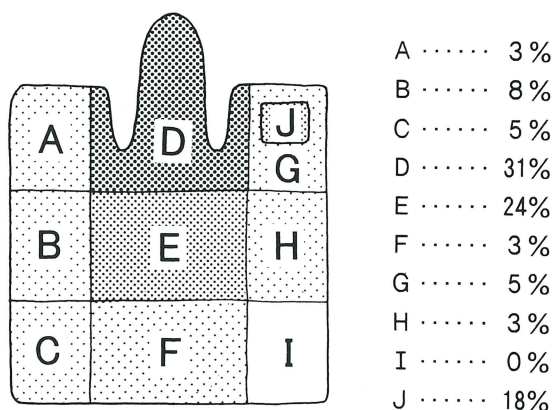
さらに、カマド周辺部のA・D・E・G・J部からの出土例を集計すると、全出土例中の86%を占め、竪穴住居内の空間利用について、著しい差異が認められた。甕の機能性から考えると、使用場所はカマドに限られると思われるが、保管場所についても、カマド周辺に設けていたためと推察することができる。

出土位置の考察からも、ミガキ処理をされている大形甕とそうでないものとの間に特別な相違点は認められなかった。このことから、製作技法による甕の使い分けをしていない可能性が高い。

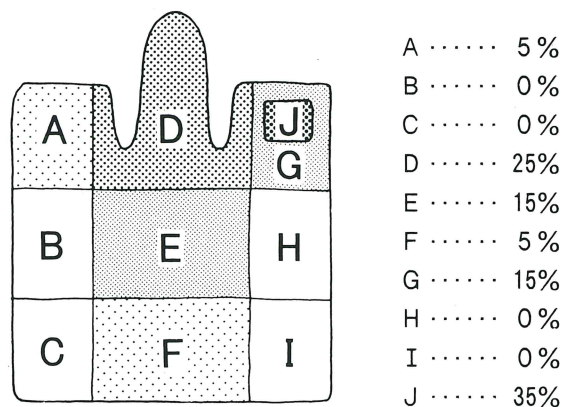
c 問題（課題）

大形甕が出現する背景には、調理方法の変化やカマドの出現などの要因が考えられる。該当時期の住居の形態や、共伴する土器の形態や出土状況などとの検討を重ねる必要があると思われる。また、同時期に出土する須恵器の甕との相違点や関連性を考察していくことも重要である。

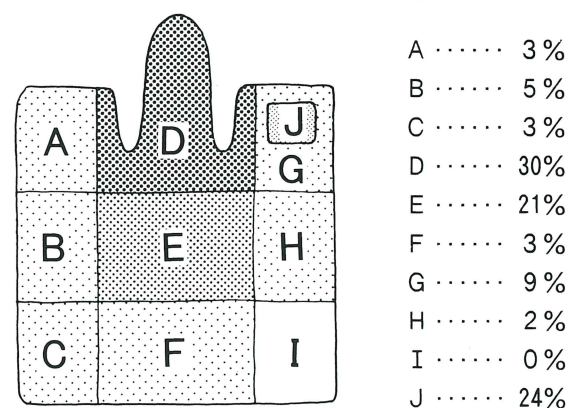
第194図 大形甕の出土位置



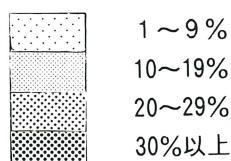
大形甕の出土位置



ミガキ処理のある大形甕の出土位置



ミガキ処理のない大形甕の出土位置



さらに、今回の分類により、同地域の大形甗は、戸森前Ⅵ期から熊野Ⅴ期の間に出土し、砂田前Ⅲ期を境に、その出土例は著しく減少することがわかった。甗が使用されなくなる要因として、木製甗の導入や調理方法の変化などを詳しく検討していく必要がある。

今回は、内面にミガキ処理されたものと、そうでないものの間に特別な相違点を認めることが出来なかった。埼玉県内の他地域でも、同じようにミガキ処理を施された甗が出土している。今後、そのような他地域での甗の出土例を詳しく比較・検討していきたい。

(真野目洋子)

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1999 『宮西遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第250集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 1999 『末野遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢太久夫、石岡憲雄 1981 『六反田』 六反田遺跡調査会、埼玉県立歴史資料館
- 柿沼幹夫 1976 「甗型土器に関する一考察」『埼玉考古』第15号
- 佐藤康二 1998 『砂田前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1991 「古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1997 「古代北武蔵の土地利用と集落」『日本歴史』第592号
- 高橋一夫 1979 「計画村落について」『古代を考える—東国集落遺跡の検討』第20号
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点—入口と集落の道」『埼玉考古』第21号
- 鳥羽政之 1997 「北武蔵における律令期集落の検討」『埼玉考古』第33号
- 鳥羽政之 1997 『中宿遺跡Ⅱ』 岡部町埋蔵文化財調査報告書第5集 岡部町教育委員会
- 鳥羽政之 1998 「律令期集落の成立と変貌（上）—北武蔵野7、8世紀の事例を中心として—」『土曜考古』第22号
- 鳥羽政之・平田重之 1997 『熊野遺跡発掘調査報告書』 岡部町遺跡調査会
- 中村倉司 1982 「大形甗—埼玉県を中心として—」『土曜考古』第5号
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集 埼玉県教育委員会
- 中村倉司 1999 『岡部条里／戸森前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飛田野正佳、鬼形芳夫 1986 『内出遺跡』 内出遺跡調査会
- 宮本直樹 1998 『岡部条里遺跡』 岡部町埋蔵文化財調査報告書第3集 岡部町教育委員会